

周易正義訓讀 一 泰卦・否卦 一

野間 文史

凡例

- 一 本稿は、唐・孔穎達奉勅撰《周易正義》の訓読訳である。
- 二 底本は、嘉慶二十年（一八一五）江西南昌府学開雕の「阮刻十三經注疏本」を基本に、主として以下の諸本と対校して作成した筆者の「校定本」を用いる。その根拠となる「校勘記」は、後に併せて掲載した。
- ◎單疏本『周易正義』（宋刊遞修 北京圖書館藏 北京人文科學研究所影傅氏宋本・易經集成本・中華再造善本 「單疏本」と略称。）
- ◎八行本『周易注疏』（宋孝宗頃兩浙東路茶塩司刊 足利學校藏 汲古書院影印本 「足利八行本」と略称。）
- ◎廣島大學所藏舊鈔本『周易正義』（「広大本」と略称。）
- 三 上記諸本以外について、また阮元校勘記以後の校勘記については、拙論「廣島大學藏舊鈔本『周易正義』攷附校勘記」（『廣島大學文學部紀要』第53卷特輯号1 一九九五年 後『五經正義の研究』所収）を参照されたい。
- 四 本稿の本文は校定した経・伝・注（王弼注〔一〕内）・疏文とその校勘記、訓読文の順である。

☷ 乾下
坤上 泰、小往大來、吉亨。

「疏」正義曰、陰去故「小往」、陽長故「大來」、以此吉而亨通。此卦亨通之極、而四德不具者、物既大通、多失其節、故不得以爲元始而利貞也。所以象云「財成」、「輔相」、故四德不具。

「物既大通」阮校 宋本「太」作「大」。閩・監・毛本作「泰」。◎單疏本・廣大本・足利八行本に従い、「大」字に作る。

泰、小往き大來たる。吉にして亨る。

「疏」正義に曰はく、陰去るが故に「小往き」、陽長するが故に「大來たり」、此れを以て「吉」にして「亨」通するなり。此の卦は亨通の極にして、而も四徳具はらざるは、物既に大いに通ずれば、其の節を失ふこと多し、故に以て元始にして貞しきに利ありと爲すを得ざるなり。（象）に「財成」、「輔相」と云ふ、故に四徳具はらざる所以なり。

象曰、「泰、小往大來、吉亨」、則是天地交而萬物通也。上下交而其志同也。内陽而外陰、内健而外順、内君子而外小人。君子道長、小人道消也。

〔疏〕「象曰泰小往大來」至「小人道消也」。

○正義曰、「泰、小往大來、吉亨、則是天地交而萬物通」者、釋此卦「小往大來。吉亨」名爲「泰」也。所以得名爲「泰」者、正由天地氣交而生養萬物、物得大通、故云「泰」也。「上下交而其志同」者、此以人事象天地之交。上謂君也、下謂臣也。君臣交好、故志意和同。「内陽而外陰、内健而外順」、内健則内陽、外順則外陰。内陽外陰據其象、内健外順明其性、此說泰卦之德也。陰陽言交、健順言卦。此就卦爻釋「小往大來吉亨」也。「内君子而外小人、君子道長、小人道消」者、更就人事之中、釋「小往大來吉亨」也。

「止由天地氣交」

〔阮校〕

閩・監・毛本同。宋本「止」作「正」。◎單疏本

・廣大本是「止」字に作り、足利八行本は「正」字に作る。「正」字が正しい。

象に曰はく、「泰、小往き大來たる。吉にして亨る」とは、則ち是れ天地交りて萬物通ずるなり。上下交りて其の志同じきなり。内は陽にして外は陰、内は健にして外は順、内は君子にして外は小人なり。君子の道長じ、小人の道消ゆるなり。

〔疏〕「象曰泰小往大來」より「小人道消也」に至るまで。

○正義に曰はく、「泰、小往き大來たる。吉にして亨るとは、則ち是れ天地交りて萬物通ずるなり」とは、此の卦の「小往き大來たる。

吉にして亨る」を名づけて「泰」と爲すを釋するなり。名づけて「泰」と爲すを得る所以は、正に天地の氣交りて萬物を生養し、物大いに通ずるを得るに由る、故に「泰」と云ふなり。

「上下交りて其の志同じ」とは、此れ人事を以て天地の交に象る。

「上」は君を謂ひ、「下」は臣を謂ふなり。君臣好を交ふ、故に志意和同するなり。

「内は陽にして外は陰、内は健にして外は順」とは、内健なれば則ち内は陽、外順なれば則ち外は陰なり。「内陽」「外陰」は其の象に據り、「内健」「外順」は其の性を明らかにす。此れ〈泰〉卦の徳を説くなり。「陰陽」には爻を言ひ、「健順」には卦を言ふ。此れ卦・爻に就きて「小往き大來たる。吉にして亨る」を釋するなり。

「内は君子にして外は小人なり。君子の道長じ、小人の道消ゆる」とは、更に人事の中に就きて、「小往き大來たる。吉にして亨る」を釋するなり。

象曰、天地交泰。后以財成天地之道、輔相天地之宜、以左右民。

〔泰者、物大通之時也。上下大通、則物失其節、故財成而輔相、以左右民也。〕

〔疏〕「象曰天地交泰」至「以左右民」。

○正義曰、「后以財成天地之道」者、由物皆通泰、則上下失節。后、君也。於此之時、君當翦財、成就天地之道。「輔相天地之宜」者、相助也。當輔助天地所生之宜。「以左右民」者、左右、助也、以助養其人也。「天地之道」者、謂四時也、冬寒、夏暑、春生、秋殺之道。若

氣相交通、則物失其節。物失其節、則冬溫、夏寒、秋生、春殺。君當財節成就、使寒暑得其常、生殺依其節。此天地自然之氣、故云「天地之道」也。「天地之宜」者、謂天地所生之物各有其宜。若大司徒云「其動物植物」、及職方云「揚州其貢宜稻麥、雍州其貢宜黍稷」。若天氣大同、則所宜相反。故人君輔助天地所宜之物、各安其性、得其宜。據物言之、故稱「宜」也。此卦言「后」者、以不兼公卿大夫、故不云「君子」也。兼通諸侯、故不得直言「先王」、欲見天子諸侯俱是南面之君、故特言「后」也。

象に曰はく、天地交るは泰なり。后以て天地の道を財成し、天地の宜を輔相し、以て民を左右す。

〔泰は、物の大いに通ずるの時なり。上下大いに通ずるときは、則ち物其の節を失ふ、故に「財成」して「輔相」し、「以て民を左右す」るなり。〕

〔疏〕「象曰天地交泰」より「以左右民」に至るまで。

○正義に曰はく、「后以て天地の道を財成す」とは、物皆な通泰するに由りて、則ち上下節を失ふ。「后」は君なり。此の時に於いて、君は當に翦財〔たちきる〕して、天地の道を成就すべし。「天地の宜を輔相す」とは、「相」は助なり。當に天地生ずる所の宜を輔助すべし。「以て民を左右す」とは、「左右」は助なり。以て其の人を助け養ふなり。

「天地の道」とは、四時を謂ふなり。冬に寒く、夏に暑く、春に生じ、秋に殺すの道なり。若し氣相交通ずれば、則ち物其の節を失ふ。物其の節を失へば、則ち冬に温く、夏に寒く、秋に生じ、春

に殺す。君は當に財節して成就し、寒暑をして其の常を得しめ、生殺をして其の節に依らしむべし。此れ天地自然の氣なり、故に「天地の道」と云ふなり。

「天地の宜」とは、天地生ずる所の物、各其の宜有るを謂ふ。〔大司徒〕に「其の動物植物」と云ふ、及び〔職方〕に「揚州其の貢は稻麥に宜し、雍州其の貢は黍稷に宜し」と云ふが若し。若し天氣大同なれば、則ち宜しき所相反す。故に人君天地の宜しき所の物、各其の性に安んじ、其の宜を得るを輔助す。物に據りて之れを言ふ、故に「宜」と稱するなり。

此の卦に「后」と言ふは、公・卿・大夫を兼ねざるを以て、故に「君子」と云はざるなり。兼ねて諸侯に通ず、故に直だ「先王」と言ふを得ず、天子・諸侯は俱に是れ南面の君なるを見さんと欲す、故に特に「后」と言ふなり。

初九、拔茅茹、以其彙、征吉。

〔茅之爲物、拔其根而相牽引者也。「茹」、相牽引之貌也。三陽同志、俱志在外、初爲類首、己舉則從、若「茅茹」也。上順而應、不爲違距、進皆得志、故以其類「征吉」。〕

〔疏〕正義曰、「拔茅茹」者、初九欲往于上、九二・九三、皆欲上行、己去則從、而似拔茅舉其根相牽茹也。「以其彙」者、彙、類也。以類相從。「征吉」者、「征」行也。上坤而順、下應于乾、己去則納、故征行而吉。

「以其彙征吉」

〔阮校〕石經・岳本・閩・監・毛本同。古本「征」作「往」。

初九、茅ちがやを抜ひくに茹じよたり。其の彙たいひを以てし、征ちきて吉きちなり。

〔茅の物爲る、其の根を抜ひきても相牽引する者なり。〕「茹」は相牽引するの貌なり。三陽志を同じくし、俱に志外に在り、初は類の首と爲り、己れ舉すれば則ち従ふこと、「茅茹」の若ごときなり。上は順ひて應じ、違距を爲さず、進みて皆な志を得、故に「其の類を以てし、征ちきて吉きち」なり。」

〔疏〕正義に曰はく、「茅ちがやを抜ひくに茹じよたり」とは、初九上に往かんと欲し、九二・九三皆な上行せんと欲し、己れ去れば則ち従ふこと、而すなはち茅を抜ひきて其の根を擧ぐれば相牽茹するに似たり。

〔其の彙を以てす〕とは、「彙」は類なり。類を以て相従ふなり。「征ちきて吉きち」とは、「征」は行なり。上は（坤）にして順ひ、下は（乾）に應じ、己れ去れば則ち納る、故に征行して「吉」なり。

象曰、「拔茅」、征吉、志在外也。

〔疏〕正義曰、「志在外」者、釋「拔茅征吉」之義。以其三陽志意皆在於外、己行則従、而似「拔茅征行」而得吉。此假外物以明義也。

〔征行而得吉〕 阮校 闕・監・毛本同。錢本・宋本「征」作「往」。◎單疏 本・廣大本・足利八行本いずれも「往」字に作る。正義本は經文ともに「往」字に作っていたのかもしれないが、今は「征」字のままとしておく。

象に曰はく、「茅ちがやを抜ひき」、「征ちきて吉きち」なるは、志外に在ればな

り。

〔疏〕正義に曰はく、「志外に在り」とは、「茅ちがやを抜ひき、征ちきて吉きち」の義を釋す。其の三陽の志意皆な外に在るを以て、己れ行けば則ち従ふこと、而すなはち「茅ちがやを抜ひき、征行」して「吉」を得るに似たり。此れ外物に假りて以て義を明らかにするなり。

九二、包荒、用馮河、不遐遺、朋亡。得尚于中行。

〔體健居中、而用乎「泰」、能包含荒穢、受納「馮河」者也。用心弘大、无所遐棄、故曰「不遐遺」也。无私无偏、存乎光大、故曰「朋亡」也。如此乃可以「得尚于中行」。尚、猶配也。「中行」、謂五。〕

〔疏〕正義曰、「包荒用馮河」者、體健居中、而用乎「泰」、能包含荒穢之物、故云「包荒」也。「用馮河」者、无舟渡水、馮陵于河、是頑愚之人。此九二能包含容受、故曰「用馮河」也。「不遐遺」者、遐、遠也。遺、棄也。用心弘大、无所疏遠棄遺於物。「朋亡」者、得中无偏、所在皆納、无私於朋黨之事、「亡、无也」、故云「朋亡」也。「得尚於中行」者、「中行」謂六五也、處中而行、以九二所爲如此。尚、配也、得配六五之中也。

九二、荒を包かね、馮河を用ひ、遐とほく遺なせず、朋亡なし。中行かなに尚なふを得たり。

〔健を體し中に居り、而して「泰」を用ひ、能く荒穢を包含し、「馮河」を受納する者なり。心を用ふること弘大にして、遐とほく

棄つる所無し、故に「遐く遺てず」と曰ふなり。私する無く偏る無く、光大を存す、故に「朋亡し」と曰ふなり。此の如くにして乃て以て「中行に尚ふを得」べきなり。「尚」は猶ほ配のごときなり。「中行」は五を謂ふ。

「疏」正義に曰はく、「荒を包ね、馮河を用ふ」とは、健を體し中に居り、而して「泰」を用ひ、能く荒穢を包含す、故に「荒を包ぬ」と云ふなり。「馮河を用ふ」とは、舟无くして水を渡り、河を馮陵するは、是れ頑愚の人なり。此の九二は能く包含容受す、故に「馮河を用ふ」と曰ふなり。

「遐く遺てず」とは、「遐」は遠なり。「遺」は棄なり。心を用ふること弘大にして、疏遠に物を棄遺する所無し。「朋亡し」とは、中を得て偏る無く、在る所は皆な納れ、朋黨に私するの事無く、「亡」は無なり、故に「朋亡し」と云ふなり。

「中行に尚ふを得」とは、「中行」は六五を謂ふなり。中に處りて行ひ、九二の爲す所此の如く、「尚」は配なるを以て、六五の中に配するを得るなり。

象曰、「包荒」、「得尚於中行」、以光大也。

「疏」正義曰、「象曰包荒、得尚於中行、以光大也」者、釋「得尚中行」之義。所以「包荒」、得配此六五之中者、以无私无偏、存乎光大之道、故此包荒、皆假外物以明義也。

「象曰包荒得尚於中行以光大也者」
阮校 单疏本・廣大本・足利八行本
に従つて、この十四字を補う。

象に曰はく、「荒を包ね」、「中行に尚ふを得る」は、光大なるを以てなり。

「疏」正義に曰はく、「象に曰はく、荒を包ね、中行に尚ふを得るは、光大なるを以てなり」とは、「中行に尚ふを得る」の義を釋す。「荒を包ね」、此の六五の中に配するを得る所以は、私する無く偏る無く、光大の道を存するを以て、故に此の「包荒」は、皆な外物を假りて以て義を明らかにするなり。

九三、无平不陂、无往不復。艱貞无咎。勿恤其孚、于食有福。

〔乾本上也、坤本下也、而得泰者、降與升也。而三處天地之際、將復其所處。復其所處、則上守其尊、下守其卑。是故无往而不復也、无平而不陂也。處天地之將閉、平路之將陂、時將大變、世將大革、而居不失其正、動不失其應、艱而能貞、不失其義、故「无咎」也。信義誠著、故不恤其孚而自明也、故曰「勿恤其孚、于食有福」也。〕

「疏」九三无平不陂一至「于食有福」。

○正義曰、「无平不陂」者、九三處天地相交之際、將各分復其所處。乾體初雖在下、今將復歸於上、坤體初雖在上、今欲復歸於下、是初始平者、必將有險陂也。初始往者、必將有反復也。无有平而不陂、无有往而不復者、猶若无在下者而不在上、无在下者而不歸下也。「艱貞无咎」者、已居變革之世、應有危殆、只爲已居得其正、動有其應、艱難貞正、乃得「无咎」。「勿恤其孚、于食有福」者、「恤」憂也。

孚、信也。信義先以誠著、故不須憂其孚信也。信義自明、故於食祿之道、自有福慶也。

○注「將復其所處」至「于食有福也」。

○正義曰、「將復其所處」者、以泰卦「乾體」在下、此九三將棄三而向四、是將復其乾之上體所處也。泰卦「坤體」在上、此六四今將去四而歸向初、復其「坤體」所處也。「處天地之將閉、平路之將陴」者、天將處上、地將處下、閉而不通、是「天地之將閉」也。所以往前通泰、路無險難、自今已後、時既否閉、路有傾危、是「平路之將陴」也。此因三之向四、是下欲上也。則上六將歸于下、是上欲下也、故云「復其所處」也。「信義誠著」者、以九三居不失正、動不失應、是信義誠著也。「故不恤其孚而自明」者、解「于食有福」。以信義自明、故飲食有福。

「猶若元在下者」〔阮校〕閩・監・毛本同。錢本・宋本「元」作「无」。下「元

在上者」同。○單疏本・廣大本・足利八行本は「无」字に作る。これ

が正しい。

「憂恤也」〔阮校〕閩・監・毛本同。宋本作「恤憂也」是也。○單疏本・廣

大本・足利八行本は「恤憂也」に作る。これが正しい。

「自今已後」○單疏本・廣大本・足利八行本が「後」字に作るのに従う。

九三、平らかにして、〔かたむ〕 破かずといふこと無く、往くとして復らざるといふこと無し。艱なやみても貞なまなれば咎とが無し。其の孚を恤なやふる勿なく、食に于いて福有り。

〔乾は本より上なり、坤は本より下なるも、而も「泰」を得るは、降ると升るとあればなり。而して三は天地の際に處り、將に其

の處るべき所に復らんとす。其の處るべき所に復れば、則ち上の尊を守り、下其の卑を守る。是の故に往くとして復らざる无きなり、平らかにして、〔かたむ〕 破かずといふこと无きなり。天地の將に閉ぢんとし、平路の將に破かんとし、時の將に大いに變らんとし、世の將に大いに革あらたまんとするに處りて、而も居は其の正を失はず、動きは其の應を失はず、艱なやみても能く貞に、其の義を失はず、故に「咎无き」なり。信義誠に著はる、故に其の孚を恤なやへずして自ら明らかかり、故に「其の孚を恤ふる勿なく、食に于いて福有り」と曰ふなり。〕

〔疏〕「九三无平不陴」より「于食有福」に至るまで。

○正義に曰はく、「平らかにして、〔かたむ〕 破かずといふこと無し」とは、九三天地相交るの際に處り、將に各おの其の處る所に分かち復らんとす。乾の體初は下に在りと雖も、今將に上に復歸せんとし、坤の體初は上に在りと雖も、今下に復歸せんと欲す。是れ初始は平らかなる者も、必ず將に險あや険有らんとするなり。初始は往く者も、必ず將に反復有らんとするなり。平らかにして、〔かたむ〕 破かざる有る無く、往くとして復らざる者有る无きこと、猶ほ下に在る者にして上に在らざる無く、下に在る者にして下に歸らざる无きが若ごとし。

「艱なやみても貞なまなれば咎とが無し」とは、己れ變革の世に居れば、應に危殆有るべきも、只だ己が居ること其の正を得、動くこと其の應有りて、艱なや難にも貞なま正なるを爲して、乃なほて「咎无き」を得るなり。

「其の孚を恤なやふる勿なく、食に于いて福有り」とは、「恤」は憂なり、「孚」は信なり。信義先づ以て誠に著はる、故に其の孚信を憂ふるを須なひざるなり。信義自ら明らかかり、故に食祿の道に於いて、自

ら福慶有るなり。

○注「將復其所處」より「于食有福也」に至るまで。

○正義に曰はく、「將に其の處るべき所に復らんとす」とは、(泰)卦は「乾體」下に在りて、此の九三將に三を棄てて四に向かはんとするは、是れ將に其の(乾)の上體の處るべき所に復らんとし、(泰)卦は「坤體」上に在りて、此の六四今將に四を去りて初に歸り向かひ、其の「坤體」の處るべき所に復らんとするを以てなり。

「天地の將に閉ぢんとし、平路の將に破かんとするに處る」とは、天は將に上に處らんとし、地は將に下に處らんとし、閉ぢて通ぜざるは、是れ「天地の將に閉ぢんとする」なり。往前は通泰し、路の險難無く、今より已後、時は既に否閉し、路に傾危有る所以は、是れ「平路の將に破かんとす」るなり。此れ三の四に向かふに因るは、是れ下上らんと欲するものなれば、則ち上六將に下に歸らんとするは、是れ上下らんと欲するなり、故に「其の處るべき所に復る」と云ふなり。

「信義誠に著はる」とは、九三の居正を失はず、動應を失はざるを以て、是れ「信義誠に著はる」るなり。「故に其の孚を恤へずして自ら明らかなり」とは、「食に于いて福有り」を解す。信義自ら明らかなるを以て、故に飲食に福有るなり。

象曰、「无往不復」、天地際也。

〔天地將各分復之際。〕

〔疏〕正義曰、象曰、「天地際」者、釋「无往不復」之義。而三處天地

交際之處、天體將上、地體將下、故往者將復、平者將破。

〔象曰〕 ◎單疏本・廣大本・足利八行本に従い「象曰」二字を補う。

象に曰はく、「往くとして復らざる无き」は、天地際ればなり。

〔天地將に各分かれ復らんとするの際なり。〕

〔疏〕正義に曰はく、象に曰はく、「天地の際」とは、「往くとして復らざる」といふこと無し」の義を釋す。而して三は天地交際の際に處り、天體は將に上らんとし、地體は將に下らんとす、故に往く者は將に復らんとし、平らかなる者は將に破かんとす。

六四、翩翩。不富、以其鄰。不戒以孚。

〔乾樂上復、坤樂下復、四處坤首、不固所居、見命則退、故曰「翩翩」也。坤爻皆樂下、己退則從、故不待富而用其鄰也。莫不與

己同其志願、故不待戒而自孚也。〕

〔疏〕正義曰、「六四翩翩」者、四主坤首、而欲下復、見命則退、故翩翩而下也。「不富以其鄰」者、以、用也。「鄰」謂五與上也。今己下復、衆陰悉皆從之、故不待財富而用其鄰。「不戒以孚」者、鄰皆從己、共同志願、不待戒告而自孚信以從己也。

六四は、翩翩たり。富まず、其の鄰を以ふ。戒めずして以て孚あり。

〔乾は上に復るを樂しみ、坤は下に復るを樂しみ、四は坤の首に

處り、居る所を固くせず、命ぜらるれば則ち退く、故に「翩翩」と曰ふなり。坤爻は皆な下るを樂しみ、己れ退けば則ち從ふ、故に富を待たずして其の鄰を用ふるなり。己と其の志願を同じくせざる莫し、故に待戒をたずして自ら孚あるなり。」

「疏」正義に曰はく、「六四、翩翩」とは、四は坤の首に主となりて、下に復らんと欲し、命ぜらるれば則ち退く、故に「翩翩」として下るなり。

「富まず、其の鄰を以ふ」とは、「以」は用なり。「鄰」は五と上とを謂ふなり。今己れ下りて復り、衆陰悉皆之れに従ふ、故に財富を待たずして其の鄰を用ふ。

「戒めずして以て孚あり」とは、「鄰」は皆な己れに従ひ、共に志願を同じくし、戒告を待たずして自ら孚信ありて以て己れに従ふなり。

象曰、「翩翩不富」、皆失實也。「不戒以孚」、中心願也。

「疏」正義曰、「皆失實」者、解「翩翩不富」之義、猶衆陰皆失其本實所居之處。今既見命、翩翩樂動、不待財富、並悉從之、故云「皆失實」也。「不戒以孚中心願」者、解「不戒以孚」之義、所以不待六四之戒告、而六五、上六、皆以孚信者、由中心皆願下復、故不待戒而自孚也。

象に曰はく、「翩翩として富まざる」は、皆な實を失へばなり。「戒めずして以て孚ある」は、中心願へばなり。

「疏」正義に曰はく、「皆な實を失ふ」とは、「翩翩として富まず」の義を解す。猶ほ衆陰皆な其の本實に居る所の處を失ふ。今既に命ぜられて、翩翩として動くを樂しみ、財富を待たず、並悉く之れに従ふ、故に「皆な實を失ふ」と云ふなり。

「戒めずして以て孚あるは、中心願へばなり」とは、「戒めずして以て孚あり」の義を解す。六四の戒告を待たずして、六五・上六皆な以て孚信ある所以は、中心皆な下に復るを願ふに由る、故に戒を待たずして自ら孚あるなり。

六五、帝乙歸妹、以祉元吉。

「婦人謂嫁曰「歸」。「泰」者、陰陽交通之時也。女處尊位、履中居順、降身應二、感以相與、用其中情、行其志願、不失於禮。「帝乙歸妹」、誠合斯義。履順居中、行願以祉、盡夫陰陽交配之宜、故「元吉」也。

「疏」「六五」至「以祉元吉」。

○正義曰、「帝乙歸妹」者、女處尊位、履中居順、降身應二、感以相與、用其中情、行其志願、不失於禮。又備斯義者、唯帝乙歸嫁於妹而能然也。故作易者、引此「帝乙歸妹」以明之也。「以祉元吉」者、履順居中、得行志願、以獲祉福、盡夫陰陽交配之道、故大吉也。

○注「婦人謂嫁曰歸」。

○正義曰、「婦人謂嫁曰歸」、隱二年公羊傳文也。

六五、帝乙妹を歸がしむ。祉を以てして元吉なり。

〔婦人嫁ぐを謂ひて「歸」と曰ふ。「泰」は陰陽交通するの時なり。女尊位に處り、中を履み順に居り、身を降して二に應じ、感じて以て相與にし、中を用ひ願を行ひ、其の禮を失はず。「帝乙妹を歸がしむ」るは、誠に斯の義に合す。順を履み中に居り、願を行ふに祉を以てし、夫の陰陽交配の宜を盡くす、故に「元吉」なり。〕

〔疏〕「六五」より「以祉元吉」に至るまで。

○正義に曰はく、「帝乙妹を歸がしむ」とは、女尊位に處り、中を履み順に居り、身を降して二に應じ、感じて以て相與にし、其中情を用ひ、其の志願を行ひ、禮を失はず。又斯の義を備ふる者は、唯だ帝乙の妹を歸嫁がしめてのみ能く然るなり。故に《易》を作る者、此の「帝乙歸妹」を引きて以て之れを明らかにするなり。

「祉」を以てして「元吉」とは、順を履み中に居り、志願を行ふを得て、以て祉福を獲、夫の陰陽交配の道を盡くす、故に大吉なり。

○注の「婦人謂嫁曰歸」。

○正義に曰はく、「婦人嫁ぐを謂ひて歸と曰ふ」とは、隱二年《公羊傳》の文なり。

象曰、「以祉元吉」、中以行願也。

〔疏〕正義曰、象曰、「中以行願」者、釋「以祉元吉」之義。正由中順、行其志願、故得福而元吉也。

「象曰」 ◎單疏本・廣大本・足利八行本に従い「象曰」二字を補う。

象に曰はく、「祉」を以てし「元吉」なるは、中にして以て願を行へばなり。

〔疏〕正義に曰はく、象に曰はく、「中にして以て願を行ふ」とは、「祉」を以てし「元吉」の義を釋す。正に中順に由り、其の志願を行ふ、故に福にして元吉を得るなり。

上六、城復于隍、勿用師。自邑告命、貞吝。

〔居泰上極、各反所應、泰道將滅、上下不交、卑不上承、尊不下施、是故「城復于隍」、卑道崩也。「勿用師」、不煩攻也。「自邑告命、貞吝」、否道已成、命不行也。〕

〔疏〕「上六城復于隍」至「自邑告命貞吝」。

○正義曰、「城復于隍」者、居泰上極、各反所應、泰道將滅、上下不交、卑不上承、尊不下施、猶若「城復于隍」也。子夏傳云「隍是城下池也」。城之爲體、由基土陪扶、乃得爲城。今下不陪扶、城則隕壞、以此崩倒、反復于隍。猶君之爲體、由臣之輔翼、今上下不交、臣不扶君、君道傾危、故云「城復于隍」。此假外象以喻人事。「勿用師」者、謂君道已傾、不煩用師也。「自邑告命貞吝」者、否道已成、物不順從、唯于自己之邑而施告命、下既不從、故「貞吝」。

○注「卑道崩也」。

○正義曰、「卑道崩也」者、卑道向下、不與上交、故卑之道崩壞、不承事於上也。

上六、城隍に復る。師を用ふる勿かれ。邑より命を告ぐ。貞なれ

ども吝りん。

「泰の上極に居り、各おの應ずる所に反り、泰道將に滅びんとし、上下交らず、卑上に承けず、尊下に施さず、是の故に「城隍に復り」、卑道崩るるなり。「師を用ふる勿き」は、攻むるを煩はざればなり。「邑より命を告ぐ。貞なれども吝」とは、否道已に成り、命行はれざるなり。」

「疏」「上六城復于隍」より「自邑告命貞吝」に至るまで。

○正義に曰はく、「城隍に復る」とは、(泰)の上極に居り、各おの應ずる所に反り、泰道將に滅びんとし、上下交らず、卑上に承けず、尊下に施さず、猶ほ「城隍に復る」が若くするなり。

《子夏傳》に「隍は是れ城下の池なり」と云ふ。城の體爲る、基土の陪扶ばいふ(扶助)するに由りて、乃ち城と爲るを得。今下に陪扶せざれば、城は則ち隕壞し、此を以て崩倒し、隍に反復す。猶ほ君の體爲るは、臣の輔翼に由るに、今上下交らず、臣君を扶けず、君道の傾危するがごとし、故に「城隍に復る」と云ふ。此れ外象を假りて以て人事に喩ふ。

「師を用ふる勿かれ」とは、君道已に傾き、師を用ふるを煩はざざる謂ふなり。「邑より命を告ぐ。貞なれども吝」とは、否道已に成り、物順従せず、唯だ自己の邑に於いて告命を施すのみなるも、下既に従はず、故に「貞なれども吝」なり。

○注の「卑道崩也」。

○正義に曰はく、「卑道崩るるなり」とは、卑道下に向かひ、上と交らず、故の卑の道崩壞し、上を承事せざるなり。

象曰、「城復于隍」、其命亂也。

「疏」正義曰、「其命亂」者、釋「城復于隍」之義。若教命不亂、臣當輔君、猶土當扶城。由其命錯亂、下不奉上、猶上不陪城、使復于隍、故云「其命亂」也。

象に曰はく、「城隍に復る」は、其の命亂るればなり。

「疏」正義に曰はく、「其の命亂る」とは、「城隍に復る」の義を釋す。若し教命亂れずんば、臣の當に君を輔くべきこと、猶ほ土の當に城を扶くべきがごとし。其の命の錯亂するに由り、下上を奉ぜざること、猶ほ上城を陪けず、隍に復らしむるがごとし、故に「其の命亂る」と云ふなり。

坤下 否之匪人、不利君子貞。大往小來。

「疏」正義曰、「否之匪人」者、言否閉之世、非是人道交通之時、故云「匪人」。「不利君子貞」者、由小人道長、君子道消、故不利君子爲正也。陽氣往而陰氣來、故云「大往小來」。陽主生息、故稱「大」、陰主消耗、故稱「小」。

否の人に匪ざる、君子の貞に利あらず。大往き小來たる。

「疏」正義に曰はく、「否の人に匪ず」とは、言ふところは否閉の世

は、是れ人道 交通の時に非ず、故に「人に匪あらず」と云ふ。「君子の貞に利あらず」とは、小人の道 長じ、君子の道 消ゆるに由り、故に君子の正を爲すに利あらざるなり。陽氣往きて陰氣來たる、故に「大往き小來たる」と云ふ。陽は生息を主とす、故に「大」と稱し、陰は消耗を主とす、故に「小」と稱す。

象曰、「否之匪人、不利君子貞、大往小來」、則是天地不交、而萬物不通也。上下不交、而天下无邦也。内陰而外陽、内柔而外剛、内小人而外君子。小人道長、君子道消也。

「疏」正義曰、「上下不交、而天下无邦」者、與泰卦反也。泰卦云「上下交而其志同」、此應云「上下不交、則其志不同」也。非但其志不同、上下乖隔、則邦國滅亡、故變云「天下无邦」也。「内柔而外剛」者、欲取否塞之義、故内至柔弱、外禦剛彊、所以否閉。若欲取「通泰」之義、則云「内健」「外順」。各隨義爲文、故此云「剛柔」、不云「健順」。

象に曰はく、「否の人に匪あらざる、君子の貞に利あらず。大往き小來たる」とは、則ち是れ天地 交らずして、萬物 通ぜざるなり。上下 交らずして、天下に邦无きなり。内は陰にして外は陽、内は柔にして外は剛、内は小人にして外は君子なり。小人の道は長く、君子の道は消ゆるなり。

「疏」正義に曰はく、「上下 交らずして、天下に邦無し」とは、(泰) 卦と反するなり。(泰) 卦に「上下 交りて其の志同じ」と云へば、

此は應に「上下 交らざれば、則ち其の志同じからず」と云ふべきなり。但だ其の志同じからざるのみに非ず、上下 乖隔すれば、則ち邦國は滅亡す、故に變じて「天下に邦無し」と云ふなり。

「内は柔にして外は剛」とは、否塞の義を取らんと欲す、故に内柔弱に至り、外剛彊を禦ぐは、否閉する所以なり。若し「通泰」の義を取らんと欲せば、則ち「内健」「外順」と云ふ。各其義に隨ひて文を爲す、故に此に「剛柔」と云ひ、「健順」と云はざるなり。

象曰、天地不交、否。君子以儉德辟難。不可榮以祿。

「疏」正義曰、「君子以儉德辟難」者、言君子于此否塞之時、以節儉爲德、辟其危難、不可榮華其身、以居祿位。此若據諸侯公卿言之、辟其羣小之難、不可重受官賞。若據王者言之、謂節儉爲德、辟其陰陽厄運之難、不可重自榮華而驕逸也。

「以居俸位」 阮校 閩・監・毛本同。錢本・宋本「俸」作「祿」。集解同。

◎單疏本・廣大本・足利八行本も「祿」字に作る。これが正しい。

「辟其陰陽已運之難」 阮校 閩・監・毛本同。宋本・集解「已」作「厄」。

◎單疏本・足利八行本・海保本は「厄」字に作り、廣大本・嘉業堂本は「厄」字に作る。「厄」字が正しい。

象に曰はく、天地 交らざるは否なり。君子 儉徳を以て難を辟く。榮するに祿を以てすべからず。

「疏」正義に曰はく、「君子 儉徳を以て難を辟く」とは、言ふところは君子 此の否塞の時に於いて、節儉を以て徳と爲し、其の危難を辟

け、其の身を榮華して、以て祿位に居るべからず。此れ若し諸侯・公卿に據りて之れを言へば、其の羣小の難を辟け、重く官賞を受くべからず。若し王者に據りて之れを言へば、節儉を謂ひて徳と爲し、其の陰陽厄運の難を辟け、重く自ら榮華して驕逸すべからざるなり。

初六、拔茅茹。以其彙、貞、吉亨。

〔居否之初、處順之始、爲類之首者也。順非健也、何可以征。居否之時、動則入邪、三陰同道、皆不可進、故「茅茹」以類。貞而不諂、則「吉亨」。〕

〔疏〕正義曰、「拔茅茹」者、以居否之初、處順之始、未可以動。動則入邪、不敢前進。三陰皆然、猶若拔茅牽連其根相茹也。己若不進、餘皆從之、故云「拔茅茹」也。「以其彙」者、以其同類、共皆如此。

「貞吉亨」者、守正而居、志在於君、乃得吉而亨通。

「故茅茹以類」阮校 闕・監・毛本同。岳本・古本・足利本「茅」上有「拔」字。今はこのままとする。

初六、茅を抜くに茹たり。其の彙を以てし、貞なるときは、吉にして亨る。

〔否の初に居り、順の始に處り、類の首と爲る者なり。順は健に非ざれば、何ぞ以て征すべけんや。否の時に居り、動けば則ち邪に入り、三陰道を同じくし、皆な進むべからず。故に「茅茹」たりて類を以てし、貞にして諂はざれば、則ち「吉にして亨る」なり。〕

〔疏〕正義に曰はく、「茅を抜くに茹たり」とは、否の初に居り、順の始に處るを以て、未だ以て動くべからず。動けば則ち邪に入り、敢へて前進せず、三陰皆な然ること、猶ほ茅を抜きて其の根を牽連して相茹たるが若きなり。己れ若し進まざれば、餘は皆な之れに従ふ、故に「茅を抜くに茹たり」と云ふなり。

「其の彙を以てす」とは、其の同類を以て、共に皆な此の如くするなり。「貞なるときは、吉にして亨る」とは、正を守りて居り、志君に在りて、乃て吉にして亨通するを得るなり。

象曰、拔茅貞吉、志在君也。

〔志在於君、故不苟進。〕

〔疏〕正義曰、「志在君」者、釋「拔茅貞吉」之義。所以居而守正者、以其志意在君、不敢懷諂苟進、故得「吉亨」也。此假外物以明人事。

「拔茅貞吉」阮校 石經・岳本・闕・監・毛本同。古本「茅」下有「茹」字。

象に曰はく、「茅を抜き」「貞なるときは吉」とは、志君に在ればなり。

〔志君に在り、故に苟くも進まず。〕

〔疏〕正義に曰はく、「志君に在り」とは、「茅を抜き、貞なるときは吉」の義を釋す。居りて正を守る所以の者は、其の志意君に在り、敢へて諂を懷き苟しくも進むことをせざるを以て、故に「吉にして亨る」を得るなり。此れ外物を假りて以て人事を明らかにす。

六二、包承。小人吉、大人否、亨。

〔居「否」之世、而得其位、用其至順、包承於上。小人路通、内柔外剛。大人「否」之、其道乃「亨」。〕

〔疏〕正義曰、「包承」者、居「否」之世、而得其位、用其至順、包承於上。「小人吉」者、否閉之時、小人路通、故於小人爲吉也。「大人否亨」者、若大人用此「包承」之德、能否閉小人之「吉」、其道乃亨。

〔用其志順〕 〔阮校〕案「志」當依注作「至」。◎單疏本・廣大本・足利八行本はまさしく「至」字に作る。

六二、包承す。小人は吉、大人は否にして亨る。

〔「否」の世に居りて、其の位を得、其の至順を用ひて、上に包承す。小人の路は通じ、内柔外剛なり。大人之れを否とすれば、其の道は乃ち「亨」る。〕

〔疏〕正義に曰はく、「包承」とは、「否」の世に居りて、其の位を得、其の至順を用ひて、上に包承するなり。「小人は吉」とは、否閉の時、小人の路は通ず、故に小人に於いて「吉」と爲るなり。「大人は否にして亨る」とは、若し大人此の「包承」の徳を用ひ、能く小人の「吉」を否閉せば、其の道は乃ち亨る。

象曰、「大人否亨」、不亂羣也。

〔疏〕正義曰、此釋所以「大人否亨」之意、良由否閉小人、防之以得其道。小人雖盛、不敢亂羣、故言「不亂羣」也。

象に曰はく、「大人は否にして亨る」は、羣を亂さざればなり。

〔疏〕正義に曰はく、此れ「大人の否にして亨る」所以の意は、良に小人を否閉し、之れを防ぎて以て其の道を得るに由るを釋す。小人盛んなりと雖も、敢へて羣を亂さず、故に「羣を亂さず」と言ふなり。

六三、包羞。

〔俱用小道以承其上、而但不當、所以「包羞」也。〕
象曰、「包羞」、位不當也。

〔疏〕正義曰、「包羞」者、言羣陰俱用小人之道包承於上、以失位不當、所包承之事、唯羞辱也。

〔唯羞辱也〕 ◎阮刻本「也」字を「已」字に誤刻する。

六三、包羞す。

〔俱に小道を用ひて以て其の上を承くるも、而も但だ當たらざらず、〕
「包羞」する所以なり。

象に曰はく、「包羞す」るは、位當たらざればなり。

〔疏〕正義に曰はく、「包羞す」とは、言ふところは羣陰俱に小人の道を用ひて上に包承し、位を失ふを以て當たらざらず、包承する所の事は、唯だ羞辱のみなり。

九四、有命无咎。疇離祉。

〔夫處「否」而不可以有命者、以所應者小人也。有命於小人、則消君子之道者也。今初志在君、處乎窮下、故可以有命无咎而疇麗福也。疇謂初也。〕

〔疏〕正義曰、「有命无咎」者、九四處否之時、其陰爻皆是小人。若有命於小人、則君子道消也。今初六志在於君、守正不進、處於窮下。今九四有命之、故「无咎」。「疇離祉」者、疇謂疇匹、謂初六也。離、麗也。麗謂附著也。言九四命初、身既无咎、初既被命、附依祉福、言初六得福也。

〔疇離位者〕 〔阮校〕「補」案「位」當依經文作「祉」。◎單疏本・廣大本・足利八行本はまさしく「祉」字に作る。

九四、命有りて咎無し。疇祉に離く。

〔夫れ「否」に處りて以て命有るべからざるは、應ずる所の者小人なるを以てなり。小人に命有るときは、則ち君子の道を消す者なり。今初志君に在りて、窮下に處る、故に以て「命有りて咎无く」して、疇福に麗くべきなり。「疇」は初を謂ふなり。〕

〔疏〕正義に曰はく、「命有りて咎無し」とは、九四否の時に處り、其の陰爻は皆な是れ小人なり。若し小人に命有るときは、則ち君子の道消ゆるなり。今初六の志は君に在り、正を守りて進まず、窮下に處る。今九四に命有りて之れに命ず、故に「咎无き」なり。

〔疇祉に離く〕とは、「疇」は疇匹を謂ひ、初六を謂ふなり。「離」は麗なり。麗は附著を謂ふなり。言ふところは九四初に命じ、

身既に咎无く、初既に命ぜられ、祉福に附依す。初六福を得るを言ふなり。

象曰、「有命无咎」、志行也。

〔疏〕正義曰、釋「有命无咎」之義、所以九四有命、得无咎者、由初六志意得行、守正而應於上、故九四之命得无咎。

象に曰はく、「命有りて咎无き」は、志行はるるなり。

〔疏〕正義に曰はく、「命有りて咎無し」の義を釋す。九四に命有りて、咎无きを得る所以は、初六の志意行はるるを得、正を守りて上に應ずるに由る、故に九四の命は咎无きを得るなり。

九五、休否。大人吉。其亡其亡、繫于苞桑。

〔居尊當位、能休否道者也。施否於小人、否之休也。唯大人而後能然、故曰「大人吉」也。處君子道消之時、己居尊位、何可以安。故心存將危、乃得固也。〕

〔疏〕「九五休否」至「繫于苞桑」。

○正義曰、「休否」者、休、美也。謂能行休美之事於否塞之時、能施此否閉之道、遏絕小人、則是「否」之休美者也、故云「休否」。「大人吉」者、唯大人乃能如此而得吉也。若其凡人、則不能。「其亡其亡、繫于苞桑」者、在道消之世、居於尊位而遏小人、必近危難、須恒自戒慎其意、常懼其危亡、言丁寧戒慎如此也。「繫于苞桑」者、苞、本

也。凡物繫于桑之苞本則牢固也。若能「其亡其亡」、以自戒慎、則有

「繫于苞桑」之固、无傾危也。

○注「心存將危」。

○正義曰、「心存將危」、解「其亡其亡」之義。身雖安靜、心意常存將有危難、恒念「其亡其亡」、乃得固者、即「繫于苞桑」也。必云「苞桑」者、取會韻之義。又桑之爲物、其根衆也。衆、則牢固之義。

「居尊得位」阮校 閩・監・毛本同。岳本・宋本・古本・足利本「得」作「當」。

◎「當」字に改める。

「但念其亡其亡」阮校 閩・監・毛本同。錢本・宋本「但」作「恒」。◎單

疏本・廣大本・足利八行本は「恒」字に作る。これに従う。

九五、否を休くす。大人は吉なり。其れ亡びんなん其れ亡びんなんとして、苞桑に繫る。

〔居は尊く位に當たり、能く否道を休くする者なり。否を小人に施し、否を之れ休くするは、唯だ大人のみにして後能く然り、故に「大人は吉」と曰ふなり。君子の道消ゆるの時に處り、己れ尊位に居れば、何ぞ以て安んずべけんや。故に心を將に危ふからんとするに存して、乃て固を得るなり。〕

〔疏〕「九五休否」より「繫于苞桑」に至るまで。

○正義に曰はく、「否を休くす」とは、「休」は美なり。能く休美の事を否塞の時に行ふを謂ふ。能く此の否閉の道を施し、小人を遏絶するは、則ち是れ「否」を之れ休美する者なり、故に「否を休くす」と云ふ。

「大人は吉」とは、唯だ大人にして乃て能く此の如くして吉を得

るなり。若し其れ凡人なれば、則ち能はず。

「其れ亡びんなん其れ亡びんなん」として、苞桑に繫る」とは、道消ゆるの世に在りて、尊位に居りて小人を遏めんとすれば、必ず危難に近づく。須らく恒に自ら其の意を戒慎し、常に其の危亡を懼るべし。丁寧に戒慎すること此の如きを言ふなり。

「苞桑に繫る」とは、「苞」は本なり。凡そ物桑の苞本に繫かれば、則ち牢固たるなり。若し能く「其れ亡びんなん其れ亡びんなん」として、以て自ら戒慎すれば、則ち「苞桑に繫る」の固きこと有りて、傾危する无きなり。

○注の「心存將危」。

○正義に曰はく、「心を將に危ふからんとするに存す」とは、「其れ亡びんなん其れ亡びんなん」とする義を解す。身は安靜なりと雖も、心意は常に將に危難有らんとするに存し、恒に「其れ亡びんなん其れ亡びんなん」と念ひて、乃て固きを得るとは、即ち「苞桑に繫る」ことなり。必ず「苞桑」と云ふは、會韻の義を取る。又た桑の物爲る、其の根衆きなり。衆は則ち牢固の義なり。

象曰、大人之吉、位正當也。

〔疏〕正義曰、釋「大人吉」之義。言九五居尊得位、正所以當遏絶小人得其吉。

象に曰はく、大人の吉は、位正しく當たればなり。

〔疏〕正義に曰はく、「大人の吉」の義を釋す。九五尊に居りて位を

得、正しく當に小人を遏絶して其の吉を得べき所以を言ふ。

上九、傾否。先否後喜。

〔先傾後通、故「後喜」也。始以傾爲「否」、後得通乃喜。〕

〔疏〕正義曰、處否之極、否道已終、此上九能傾毀其否、故曰「傾否」也。「先否後喜」者、否道未傾之時、是「先否」之道、否道已傾之後、其事得通、故曰「後有喜」也。

上九、否を傾く。先には否ふきがり後には喜ぶ。

〔先に傾き後に通ず、故に「後には喜ぶ」なり。始は傾を以て「否」と爲し、後には通ずるを得て乃ち喜ぶ。〕

〔疏〕正義に曰はく、否の極に處り、否道已に終る。此の上九は能く其の否を傾毀す、故に「否を傾く」と曰ふなり。「先には否ふきがり後には喜ぶ」とは、否道の未だ傾むかざる時は、是れ「先に否ふきがる」の道にして、否道已に傾くの後、其の事通ずるを得、故に「後に喜び有り」と曰ふなり。

象曰、否終則傾、何可長也。

〔疏〕正義曰、釋「傾否」之義。否道已終、通道將至。故「否」之終極、則傾損其否、何得長久。故云「何可長也」。

象に曰はく、否終れば則ち傾く、何ぞ長かるべけんや。

〔疏〕正義に曰はく、「否を傾く」の義を釋す。否道已に終り、道を通じて將に至らんとす。故に「否」の終極は、則ち其の否を傾損し、何ぞ長久なるを得んや。故に「何ぞ長かるべけんや」と云ふ。